国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成26年8月1日発行　第38巻第8号通巻第443号

みんぱくは創設40周年を迎えます

月刊みんぱく

2014 8月号

特集

多みんぞくニホン

特別展「多みんぞくニホン」から10年　庄司博史
朝鮮学校の今　藤井幸之助
苦学して夢をかなえるネパール人　南真木人
中華学校の子どもたちにみるニホン　陳天璽
ベトナム寺の建立　野上恵美
ブラジル人の足あと　拝野寿美子
新大久保・イスラーム横丁の今　菅瀬晶子

帰ってきた浦島太郎

アンジェロ・イシ

サッカーW杯開催の効果で、今年はブラジルがメディアに頻繁に登場している。先入観やステレオタイプの再生産に過ぎない記事や番組も少なくないが、六月初めに放送されたNHK-FMラジオのブラジル特集番組はこれらとは一線を画していた。ありきたりのサンバやボサノバではなく、滅多に聴けない様々なジャンルのブラジル音楽が紹介された。

中でも懐かしく堪能できたのが、七〇～八〇年代にブラジルのテレビで流れた日本往復便のCMソングである。探せばインターネットの動画サイトでも視聴は可能だが、ノスタルジーに浸るにはなんだか物足りない。今回は私も解説者としてスタジオでの番組収録に参加できたおかげで、LPレコードで再生されたこの曲に直接触れるという幸運に恵まれた。

CMはポルトガル語と日本語で流されていたが、曲のモチーフはかの有名な浦島太郎のお伽話だ。日本語版の歌詞を一部要約すると「昔々、浦島は助けた亀に連れられてブラジルにやって来た。居心地の良さに故国を忘れて住み着いたが、故国が恋しくなって別れを告げると、プレゼントされた玉手箱には日本までの往復切符が入っていた」といった内容である。

歌っているのはローザ・ミヤケ。ブラジルの日系移民社会では誰もがその名と声を一度は聞いたことがあるタレントだ。彼女が司会を務めたテレビ番組「イマージェンス・ド・ジャポン」は日系人以外の視聴者も多かったので、ブラジルの日本ファンを増やす上での貢献は計り知れないが、番組の看板企画であった「Uta no Champion」というのど自慢コンテストは思わぬ形で日本に「輸出」された。私は南米から日本への「デカセギ移民現象」を研究するために一九九〇年に来日して以来、在日ブラジル人社会を追跡してきたが、今やブラジルタウンとして名高い群馬県大泉町でブラジル人による最初の「全国のど自慢」に出合い驚愕した。イベントの形も、副賞として贈られる新車や日伯往復航空券も、あの「歌のチャンピオン」そのものであった！

この見事な再現を目の当たりにし、デカセギ現象はブラジルの日系移民文化を「空洞化」させたのではなく、日本に「空動化」させたのだと確信した。そしてその人と文化の大移動を可能にしたのは、まさにあのCMで歌われている長距離フライトだ。その恩恵を受けて、生き心地の良さに故国を忘れかけた私も、日伯の往復切符を多用し、浦島太郎にならずに日本に住み着いている。

プロフィール
1967年サンパウロ市生まれ。武蔵大学社会学部教授。サンパウロ大学ジャーナリズム学科卒業。90年に来日、新潟大学大学院および東京大学大学院を経て、ポルトガル語新聞の編集長を務めた。日伯の移民やメディアの研究をしながら、日本各地で国際交流や共生をテーマに講演をおこなう。2010年より現職。著書に『ブラジルを知るための56章』（明石書店）など。

月刊 みんぱく 8月号目次

1 エッセイ 千字文
帰ってきた浦島太郎
アンジェロ・イシ

2 特集
多みんぞくニホン

2 特別展「多みんぞくニホン」から10年
庄司 博史

4 朝鮮学校の今
――コリアンコミュニティとともに 藤井 幸之助

5 苦学して夢をかなえるネパール人 南 真木人

6 中華学校の子どもたちにみるニホン 陳 天璽

7 ベトナム寺の建立
――ベトナム人コミュニティの現在 野上 恵美

8 ブラジル人の足あと 拝野 寿美子

9 新大久保・イスラーム横丁の今 菅瀬 晶子

10 集めてみました世界の○○
水筒編 久保 正敏

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
伝統は単数か複数か？――モンゴル馬頭琴伝統音楽
上村 明

16 多文化をあきなう
小さな町の大きな挑戦
――“穏豊社会”への一里塚
神田 浩史

18 味の根っこ
ホットク
髙 正子

20 人間学のキーワード
ガバナンス
出口 正之

21 異聞逸聞
変容するボリビアの日本人学校
吉富 志津代

22 制服の世界、世界の制服
空の企業文化
八巻 惠子

24 次号予告・編集後記

特集

多みんぞくニホン

「日本の文化」展示リニューアルの一環として、今年三月「多みんぞくニホン」セクションが新設された。本館展示場の最後をしめくくる一角に在日外国人を取りあげた意義は大きい。じつは、この展示を先どりするかたちで、すでに一〇年前の二〇〇四年に同名の特別展を民博で開催している。外国人がうなぎのぼりに増加していた当時をふりかえりながら、今日の多みんぞくニホンを構成する人びとと、かれらを取りまく状況について考えてみたい。

中国人が来日する際に持参したかばん。
1920年代に使用された。
地域：兵庫県神戸市　標本番号 H0275654

特別展「多みんぞくニホン」から一〇年

庄司博史（しょうじ ひろし）
民博 民族社会研究部

二〇〇〇年代初頭、特別展「多みんぞくニホン――在日外国人のくらし」の構想を練っていたころ、日本では外国人が急増しはじめていた。一九九〇年の約一〇七万人から一二年のあいだに八〇万人も増加した外国人との接触があらゆる場所ではじまった。多くの人びとはかれらを戸惑いつつも好意をもってうけとめたが、文化摩擦や受け入れ体制の不備からさまざまな問題も生じていた。展示では外国人の生活を近距離から取りあげるとともに、ごみや騒音をめぐる摩擦や情報不足のため孤立・困窮するかれらへの支援の手にも焦点をあてた。

展示の目的は外国人の存在を身近に感じ、近い将来に予想されるかれらとの共存の道をさぐることにあった。その背景には、外国人の増加と日本社会への受容が〝順調に〟すすむであろうという推測があった。三か月足らずで特別展は終了したが、来館者の肯定的な評価をバネに常設展示への構想を機会のあるごとに提案してきた。

ミックスの子どもたち。まんなかの子のお父さんはアラブ系トルコ人、お母さんは日系ブラジル人

定住化がすすむ移民

今回実現した展示の基本理念は二〇〇四年の特別展とかわるものではない。ただし外国人をとりまく状況は変化しつつある。かつて、いろいろな意味で新鮮な関心の対象であったニューカマーは多くが日本でうまれた二世をかかえる世代となり、定住化がすすんでいる。外国人という名称にならんで移民ということばも耳にするようになった。コリアンなど四、五世代を経たオールドカマーも、ニューカマーへの脚光とともに改めて移民としての存在を模索しはじめたようだ。

一方で、外国人の増加は続き、かれらの社会参加も進展するであろうという当初の予想は、近年の経済不況や国際情勢のなかで修正せざるを得なくなった。

試練の時代

在日外国人をめぐる状況でもっとも大きな変化は二〇〇八年のリーマンショックにはじまる経済不況である。二〇〇八年に二二三万人のピークに達した在日外国人数は職を失った人びとの離日により減少しはじめ、二〇一三年には二〇〇万人にまで落ち込んだ。一時三二万もいたブラジル人は三分の一が帰国し、日本に残った人びとの生活レベルにも大きな影響がみられる。長期ローンでやっと手に入れた持家を手放したり、授業料を払えぬ家庭が続出し閉鎖においこまれたブラジル人学校の話は枚挙にいとまがない。

一方で「日本には移民政策がない」といわれてきた状況が変わりはじめている。少子化と将来の労働力不足の下支えに移民労働者の導入が検討され始めている。高度人材と短期の低賃金労働者とをポイント制度で選別し入国や滞在の条件を決定するシステムのなかで、働き手としては対象外の呼び寄せ家族や難民は社会のお荷物として扱われる恐れがある。

日本人の境界をめぐって

しかしもっと深刻な兆しもある。コリアンを中心とする外国人への憎悪的言動だ。ネットの世界でまかり通っているおぞましいことばが、真昼の街頭でも目や耳にとびこんでくる。不況や複雑な国際情勢への不満のはけ口では済ませない不寛容と排外主義が感じられる。「違うことはいいことだ」といっていた〝多文化共生〟は、政治とともに姿をあらわにしはじめた単一民族志向の勢いになすすべはないようだ。

とはいえ日本は、民族の境界を固め、閉じこもろうとする意識を突きくずせる方向にもすすんでいる。今日ほぼ長野県民人口に相当する外国人とともに、かれらと日本人、あるいはかれら同士のあいだでのミックスの子どもたちとそれを見て育つ子どもたちが増えている。多数派への同化とそれに抗する大人たちの動きの狭間（はざま）で、今や新生児の三パーセントをしめるミックスの子どもたちは大人が拘泥してきた国家や民族、言語の境をその存在そのもので超え、革新的なグレーゾーンの領域を広げつつある。境界固守の妄想を覚醒させるには、ことばよりはるかに効果がありそうだ。

朝鮮学校の今
――コリアンコミュニティとともに

藤井幸之助（ふじい こうのすけ）
関西学院大学非常勤講師

文化の継承を

朝鮮学校。多くの読者には未知の存在、あるいはマイナスのイメージでとらえられているかもしれない。朝鮮のことばや文化・歴史を知らない子どもたちに教えるためにつくられ、歴史は戦前から数えると七〇年を超える。現在、福岡から北海道まで初級・中級・高級学校・大学校が六六校ある。少子化もあいまって、ピーク時の一九七〇年代に比べると四割ほどにまで減少している。日本の学校教育法では第一条に規定された学校ではなく、各種学校とされている。しかし、中身を見てみると、日本の教育と遜色のない内容を朝鮮語でおこなう民族学校として、数少ない言語継承の場でもある。

朝鮮学校に子どもを通わせる二世や三世の親たちの多くは、自身も朝鮮学校の出身だ。朝鮮人であることに誇りをもてるよう、自分たちが経験してきたことを子どもたちにさせてやりたいという。なかには日本学校に通い、民族的なことを学べなかった後悔から、子どもには朝鮮学校で朝鮮語をしっかり学ばせたいという親もいる。子どもたちの多くは三世や四世で、朝鮮籍・韓国籍のほかに、父母のどちらかが日本人という子どももいる。朝鮮学校を卒業し、日本の大学や社会で活躍している人は少なくない。

上：文化祭の一場面（2012年6月、北大阪朝鮮初中級学校）
下：休み時間の子どもたち（2013年6月、中大阪朝鮮初級学校）

子どもたちは両親・祖父母はもちろん、学校の教職員や地域の同胞コミュニティから非常に大切にされている。上の子は下の子たちの面倒をよく見る。運動会など一家総出で応援に来て、お昼はみんな一緒に弁当をつつく。

少人数の強み

ただ、いいことばかりではない。日朝関係がかんばしくないなか、世間の無知や偏見から、朝鮮学校に対する風当たりは並大抵のものではない。高校授業料無償化の不適用や地方自治体からの補助金不交付など、あからさまな差別については、国連人種差別撤廃委員会から日本政府に対し、是正勧告が出されている。

現在、学校数や児童生徒数は減少気味であるが、人数が少ないことが幸いすることもある。芸術活動にも力を入れていて、サッカークラブの男の子たちも発表会が近づくと伝統打楽器のチャンゴやプクや合唱だって練習する。本番では定番の民族舞踊や伝統楽器の演奏のほかに、K－POPにダンスまで飛び出し、芸達者が多い。

朝鮮学校で学ぶ子どもたちも日本社会を構成する大切なメンバーだ。かれらとともにどう生きていくのか。今こそ日本社会が変わるチャンスでもある。

苦学して夢をかなえるネパール人

南真木人（みなみ まきと）
民博 文化資源研究センター

料理人から留学生へ

日本に在留するネパール人は約三万二千人にのぼるが（二〇一三年）、その約半数はインドないしはネパール料理店で働く料理人とその呼び寄せ家族である。インド料理店であっても働いているのはネパール人という店が少なくないのだ。とはいえ全国いたるところに新規のインド料理店が開店し、マーケットが飽和してきているなか、ネパール人料理人の増加率は以前ほど高くない。今やネパール人の在留資格でもっとも多いのは「留学」なのである。

なかでもここ数年急増しているのが、日本語学校などの専門学校に通う若者である。四年制大学の入学を目指し日本語を学んでいる人もいるが、大多数の人は働きながら日本語を二年間学び、さらに三年、ビジネスITや工学などの専門学校へ通うことを志す。それが可能となるのは、留学生が「資格外活動許可」さえ得れば一週二八時間まで、学校の長期休業期間は一日八時間まで報酬を受ける活動ができるからだ。また、人材確保に苦労する地方の食品製造業や機械製造業などが、その解決策として留学生のパート労働に期待しているからでもある。こうしてネパールの大学を卒業した若者は、一〇〇万円ほどの初年度経費を借金してでも工面し来日するようになった。

整備される留学システム

一方、少子化と中国や韓国からの留学生の減少を危惧する日本の専門学校は、福島原発事故後も増加しているベトナムとネパールからの留学生に熱い視線をおくる。例えばカトマンドゥで催された「日本留学フェア二〇一三」では、二〇の日本語学校がブースを出し、日本人職員が熱心に応対していた。ネパール側も留学を仲介する教育コンサルタント会社が急増している。そこではどこの地方入国管理局が在留資格認定証明書の交付率、すなわち留学の成功率が高いかといった数値までが共有され、留学生の送り出しシステムが整備されつつある。

日本では震災復興と東京オリンピックによる建築ラッシュをひかえ、外国人技能実習制度の改定によって外国人労働者の受け入れ拡大を進めようとしている。専門学校への留学と資格外活動は、外国人に単純労働の門戸を開いた先行する形態としてもっと注目されてよい。苦学して五年後に、日本の会社へ就職するネパール人の若者が増える日も遠くないだろう。

上：教育コンサルタント会社の宣伝バナー（2013年3月、カトマンドゥ）
中：「日本留学フェア2013」の受付。入場は無料（3月、カトマンドゥ）
下：多くの在留ネパール人が集ったNepal Festival 2013（9月、上野公園）

中華学校の子どもたちにみるニホン

陳天璽（ちんてんし）　早稲田大学 准教授・民博 特別客員教員

はじまりは港町

中国系コミュニティといえば、神戸、横浜など中華レストランが軒を連ねる中華街を想起する人が多いだろう。これらの港町へ、幕末の開港にともない多くの西洋人が買弁（ばいべん）（仲買人）とよばれる中国人を伴ってやってきた。中華街が洋館の立ち並ぶ元町附近に位置するのは、そんな歴史的由縁がある。近所を散策すると、しばしば日本の近代化に関係する史跡のほか、改革開放以前より在住している老華僑（ろうかきょう）が設立した中華学校、関帝廟（かんていびょう）などの宗教施設、会館や同郷会などの互助組織を目にすることができる。

しかし、現在の在日中国人の分布を見てみると、じつは東京在住者がもっとも多く、ついで神奈川、大阪、埼玉、愛知、千葉などに集中している。これは一九七九年の改革開放以降より、引き続き来日している中国人留学生をはじめとする新華僑に起因する。一九八〇年代初期まで、在日中国人人口は台湾出身者も含め五万人ほどを推移していた。その後、中国からの留学生、研修生、帰国者などの来日が増え、昨年末の国籍別在留外国人（登録外国人）統計によると、今では六五万人に上る。中国人は在日外国人の三分の一を占め、最大の外国人グループとなった。このほかにも、日本国籍を取得した中国系が一一万人以上、非正規滞在者が二〜三万人、さらには国際結婚家族で中国系の親をもつ子も含めると、在日中国系の人口は八〇万人をゆうに超えるだろう。

今どきの中華学校

人口が増えているだけでなく、多様化も進んでいる。中国系コミュニティの縮図である横浜中華学院からは、その実態が見えてくる。近年、中華学校への入学を希望する親御さんが増えているが、生徒の背景を見ると、祖父も日本生まれという華人四世の子、台湾生まれで親の仕事の関係で来日した子、片親が日本人もう一方の親が中国系の子、欧米人の父と中国人の母をもつ子、なかには中国系の血筋をもたない子もいる。さまざまな背景をもつ子どもたちが同じ教室で学んでいる。授業言語はいうまでもなく中国語であり、子どもたちは獅子舞など中国伝統芸能を身につけている。しかし、好きな遊びはパズドラ、大好物はカレーだ。

これからの社会を担う子どもたち、そして、在日中国系コミュニティがこれだけ多様化しているのをみると、それを内包している日本社会は確実に多みんぞくニホンとなっているのがわかる。

上：休み時間、教室で過ごす生徒たちのようす
右上：クリスマス会に龍舞をする横浜中華学院の生徒たち
右下：大阪中華学校の教室

ベトナム寺の建立
——ベトナム人コミュニティの現在

野上恵美（のがみえみ）　神戸大学大学院国際文化学研究科

叶った夢

初めてわたしが兵庫県神戸市長田区の在日ベトナム人コミュニティを訪れたのは、特別展「多みんぞくニホン」が開催された二〇〇四年のことだった。この一〇年間、わたしは、多くの子どもたちの成長や、新しい命の誕生を見てきた。当時、二歳だった在日ベトナム人二世の女の子は、現在は小学校六年になり、すっかり少女へと成長した。その一方で、大切な家族との永遠の別れに直面し、深い悲しみに包まれた人びとの姿も見てきた。在日ベトナム人が難民として日本という地に根を下ろし始めてから、三九年が経過しようとしている。在日ベトナム人コミュニティは、確実に日本社会に根付きつつあるが、依然として外国人コミュニティゆえの問題に直面している。

前回の特別展から今回の常設展示の実現までの一〇年で、在日ベトナム人コミュニティ内に起こったもっとも大きな出来事は、ベトナム寺が建てられたことだろう。信仰の拠（よ）りどころとして、自分たちの寺をもつことは、在日ベトナム人仏教徒にとって悲願であった。二〇一二年五月におこなわれた落成式では、涙ながらに今日という日を迎えられた喜びを語る女性の姿があった。その後、二〇一三年には、兵庫県姫路市にもベトナム寺院二寺が建てられた。日本におけるベトナム寺は、在日ベトナム人仏教徒のための信仰の場としてだけではなく、ベトナム伝統行事をおこなう文化継承の場、日本人ボランティアを講師に招き日本語教室をおこなう相互交流の場として、地域の人びとの生活をより豊かなものにする役割を果たしている。

第二世代がつくる希望

近年では日本におけるベトナム人人口が、結婚や留学によって増加しており、在日ベトナム人コミュニティの規模は拡大し、活発化することが予想される。しかしながら、ことばの問題や差別、そして二世の教育など、以前から指摘されている問題が残されたままである。それだけでなく、一世の高齢化という問題も顕在化しつつある。これらは、日本社会の問題として日本人も考えていかなければならないが、一方で在日ベトナム人二世たちも真剣に取り組んでいる。このような若い在日ベトナム人の姿から、在日ベトナム人コミュニティのさらなる可能性を感じずにはいられない。

神戸市長田区に建立された寺の仏像

上：姫路市D寺での灌仏会（かんぶつえ）〈花祭〉のようす（2013年5月）
下：神戸市カトリック教会での旧正月のつどいのようす（2014年2月）

ブラジル人の足あと

拝野寿美子
神田外語大学非常勤講師

帰国するブラジル人

日本に住むブラジル人は二〇一三年末現在およそ一八万人。ピーク時（二〇〇七年末）の三二万人から半減するのは、もはや時間の問題だ。集住地の雇用現場では「ブラジル人不足」が嘆かれ、かつては二〇〇名を超えていたあるブラジル人学校の就学者も今では二ケタになった。改定入管法が施行されブラジル人が急増した一九九〇年から、まもなく二五年を迎える。

今からおよそ三〇年前、インフレ率が二〇〇〇パーセントを超えるほどの経済的混乱がブラジル人の国外流出を促したのだが、二〇〇〇年代半ば以降、ブラジルは経済新興国と称され再び世界中から移民が集まる国となった。海外在住ブラジル人の帰国も相次いでいる。

シュラスコサンド移動販売車

取り込み、飛び込んでいく

二五年という歳月が残したものは決して少なくない。特に集住地では、ブラジル人と地域の人びとが共生するなかで、相手を自らに取り込もう、自ら相手に飛び込もうという試みがなされてきた。シュラスコサンドもそのひとつ。サンドイッチにアレンジされたシュラスコ（ブラジルの代表的な料理である肉の串刺し）が、日本語のメニューを大きく掲げたトラックで移動販売されている。群馬県大泉町にあるブラジル人向けのスーパーマーケットでは、日本人顧客を獲得するための店員への日本語の授業が始まり、ブラジル人が設立した教会では、日本人向けのミサがおこなわれるようになった。一方、代表的な集住地である浜松市に本社を置く日本の食品製造販売会社は、ブラジルの軽食であるパステルを日本人になじみのある味付けにして商品化し、店舗を首都圏にまで拡大している。

異文化との出合いは自文化を豊かにするというが、二五年を経てようやくそれを確かめられるようになってきた。商品のように形ある文化はわかりやすい。ブラジル人との共生でわたしたち日本人はどのように変化してきているのか。一方で、その多くが二〇代となっているブラジル人第二世代は、これからどのように生きていくのか。彼らはわたしたちの社会を映し出す鏡でもある。両者の内面にある目には見えないお互いの足あとを辿る作業はまだ緒についたばかりである。

ブラジル人が通う大泉町の教会。日本語とポルトガル語が併記されている

新大久保・イスラーム横丁の今

菅瀬晶子
民博 研究戦略センター

変わりゆくふるさと

「新大久保出身」というと、必ずといってよいほど「ああ、外国人がたくさんいるところですよね」と言われる。そのことばの陰にはたいてい、マスコミが喧伝する「国際犯罪の温床」というイメージが隠れていて、あまりよい気分はしなかった。一九九〇年代にはこの界隈の東南アジア料理店がエスニックブームを牽引し、その後二〇〇二年の日韓共催サッカーワールドカップを契機に、「韓流の街」として名を馳せるようになったのは、周知のとおりである。しかし今、この街でもっとも勢いがあるのはムスリムだ。なにしろ「イスラーム横丁」とよばれる一角まで登場しているのである。

東京有数のムスリムタウンへ

二〇〇六年の早春、JR新大久保駅から実家へ向かう途上で、いきなり「中東の市場の匂い」が濃厚に漂った。シナモンやクミン、カルダモンなど、幾種類ものスパイスが混じりあったその匂いは、パレスチナをおもな調査地とするわたしにとって嗅ぎ慣れたものである。匂いの出所を探ると、路地裏にインド人ムスリムがハラール食材店を開店していた。雑然とした店構えではあったが、客がひきもきらず、誰もが両手いっぱいに食材を買い込んでゆく。彼らの最大のお目当ては、当時まだ日本では貴重だったハラール肉であった。イスラームの作法にのっとって加工されたハラールの冷凍肉を、この店はオーストラリアやブラジルから仕入れ、販売していたのである。

ほどなくしてこの店は表通りに進出し、見る間にライバル店も増え、一帯は東京有数のムスリムの情報交換の場にまでなった。店の仕入れルートも輸入のみではなく日本市場とかかわるようになり、今ではハラール肉を群馬県の専用加工場で生産するまでになっている。外国人ムスリムで占められていた客層も次第に変化し、本場トルコの職人が手掛けるケバブ・スタンドには地元の高校生が列をなし、エスニック料理ファンの多彩な年齢層の日本人が、手に入りにくい食材を求めて全国からやってくる。国籍も人種もさまざまな人びとが、日本語を共通語としてコミュニケーションを取る姿は、なかなか感慨深い。「国際犯罪の温床」から真の国際都市へと、新大久保が変貌を遂げつつある証が、ここにある。

みんぱくで展示されているケバブ店の看板。ケバブ丼まである。
標本番号 H0274584

ハラールフードをあつかうお店の店内

新大久保のイスラーム横丁

集めてみました世界の

久保 正敏（くぼ まさとし）　文化資源研究センター

2010年に3ヵ月間開催された企画展「水の器　手のひらから地球まで」に備え、民博所蔵の世界の水の器を調べたことがある。もっとも興味深かったのは、素材や製法、使用法が、地域の自然環境・文化・技術を如実に反映している点だ。ここに紹介する水筒も、植物素材、動物素材、陶器、工業製品までバラエティに富み、まさに道具とは、人間と環境をつなぐメディアであり、文化を「もの語る」ことを、あらためて実感できる。エコロジーの観点もふくめ、水筒を見直してみてはいかがだろうか。

※寸法の単位はセンチメートルです。

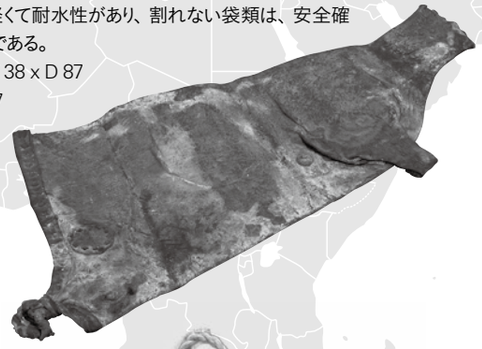
ハンガリー
左の木製、右の陶製、これら二点のように、素材は異なるが形はそっくりの水筒は、道具を使う人の所作が極めて保守的であることを示しているのかも知れない。

(左) H 29 x W 23 x D 11
H0031672
(右) H 25 x W 19 x D 8.7
H0031671

台湾
フタ付きの竹筒。稈（かん）が太いゾウタケに紐を付けて背負い、谷から水を村まで運ぶ。
H 99 x D 12
H0009471

日本（山口県）
竹筒。日本のタケは小振りで、水の容器として古来重宝され、室町ごろまでは単に「筒（つつ）」とよばれ、やがて水筒の語源と原型になった。時代劇でも、似た筒がよく見られる。
H 37 x D 10
H0018825

イラク
羊の革製。表皮を縫い合わせたもので、飲み口などは紐でしばったものか。植物資源の乏しい乾燥地域や長距離を移動する遊牧民のあいだでは、皮を縫い合わせたり、胃袋や膀胱（ぼうこう）などの内臓を使った水筒がよく見られる。軽くて耐水性があり、割れない袋類は、安全確実な水筒である。
H 2.2 x W 38 x D 87
H0088167



インド
名札がついている通学用の水筒。学校での水事情を考慮し水筒を持参させたものか。わたしも、魔法瓶型やペットボトルが普及する以前の遠足などで似た水筒を使ったことを思い出す。
H 20 x W 14 x D 10
H0200909

ナミビア
ダチョウの卵の殻で作られた土産用の水筒。栓と毛皮の袋が付いている。
H 15 x W 13 x D 13
H0204327

マレーシア
死者を弔うために燃やす紙製水筒は、中国系の人びとが供物用の紙銭の一種として正月などの祭礼の際に焼き、別世界の人びとに送り出すものだ。こうしたバーチャルな用途の道具も、文化の奥深さを物語る。
H 34 x D 10
H0198005

パプア・ニューギニア
ヒョウタン製。アフリカ原産のヒョウタンは人類最古の栽培植物のひとつといわれるだけに、土器に先立って世界各地で使われていたようだ。水容器として重宝なので、水のシンボルともなり、また、中空の中味は異界とつながる、という説話も数多い。この資料も、本来はフタがあるはずだが、見当たらなかった。
H 21 x W 12 x D 61
H0001368

コロンビア
ガラスビンに編み物をかぶせて持ち運びの便を図ったもの。
H 22 x D 8.3
H0028633

特別展
国立民族学博物館創設40周年記念
日本文化人類学会50周年記念

「イメージの力」
――国立民族学博物館コレクションにさぐる――

人間の作り出したイメージのはたらきや受けとめられ方に、人類共通の普遍性があるのか否かをさぐります。

会期　9月11日（木）～12月9日（火）
会場　特別展示館

企画展
「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」

グリーンランドの自然、そこに住むイヌイットの人びとの歴史と文化を紹介します。

会期　9月4日（木）～11月18日（火）
会場　企画展示場

■関連イベント

◆ワークショップ
「グリーンランドの彫像トゥピラクを作ろう」
紙粘土を使ってトゥピラクを作ります。
日時　9月7日（日）13時30分～16時30分
会場　本館第3セミナー室、企画展示場
※要事前申込（先着順）、参加費500円（要展示観覧券）、小学1年生以上対象、定員15名
お問い合わせ先
情報企画課　電話　06・6878・8532

みんぱくフォーラム2014
◆展示場クイズ「みんぱQ」
日本の文化「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」編　8月26日（火）まで

企画展
「みんぱくおもちゃ博覧会――大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」

会期　8月5日（火）まで
会場　企画展示場

博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく
「学校と博物館でつくる国際理解教育――センセイもつくる・あそぶ・たのしむ――」

本館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、博学連携の意義や可能性について考えます。

日時　8月5日（火）10時20分～17時
会場　本館講堂、セミナー室、本館展示場内
※参加無料（要事前申込、当日参加も可）
お申し込み・お問い合わせ先
情報企画課　FAX06・6878・8242

連続講座「台湾文化を知る」
会場　本館第5セミナー室
日時　8月10日（日）14時～16時
講師　謝仕淵（国立台湾歴史博物館研究組組長）
話題　**嘉農とKANO――甲子園を目指した台湾球児たち**
日時　8月31日（日）14時～16時
講師　野林厚志（本館 教授）
話題　**悪い魚と普通の魚――タオ族の魚食文化**
※申込不要、参加無料、定員80名

みんぱく秋の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス
秋の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。
実施日　8月22日（金）、25日（月）
時間　14時～17時
会場　本館第5セミナー室

みんぱくワールドシネマ
「ヒア・アンド・ゼア」

出稼ぎ先からメキシコの故郷の村に帰ってきた男と家族の生活を見つめていきます。

日時　8月30日（土）13時30分～16時30分
会場　本館講堂
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
※当日11時30分よりナビひろばにてメキシコ移民映画についてのミニレクチャーあり

研究公演
「伝統芸能パンソリによる韓国文化の理解」

舞台公演およびワークショップを通してパンソリの世界を体験できます。

日時　9月15日（月・祝）13時30分～16時30分
会場　本館講堂
※要事前申込（8月21日必着）、参加無料

みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター
「みんぱくの地球探究紀行」

研究者が撮影した世界各地の記録映像と研究者によるレクチャー。お弁当付き。

時間　11時～13時30分
会場　あべのハルカス近鉄本館「スペース9」
主催　産経新聞社
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団
※要事前申込（申込締切は各回開催日の1週間前）、参加費　各回3000円

8月6日（水）福岡正太（本館 准教授）
島のまつりに人がつどう――鹿児島県硫黄島
8月20日（水）横山廣子（本館 准教授）
トンパ村――雲南シャングリラに芽生えた文化復興
8月27日（水）野林厚志（本館 教授）
五年に一度、祖先に会う――台湾 パイワン族の五年祭
お申込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
電話　06・6633・9087

●無料観覧日のお知らせ
8月11日（月）～24日（日）は、家族でお出かけ節電キャンペーンとして高校生以下・65歳以上の方は無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。

※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

みんぱく創設40周年記念
『世界民族百科事典』
丸善出版　20,000円（税抜）

本事典は、国立民族学博物館を編集主体として、世界の民族をめぐるさまざまな事象、問題を主題的に取り上げて、人類学、民族学および周辺領域の研究者が、簡潔かつ具体的に解説したものです。

ビデオテーク新番組（8月公開予定）

VT番号	タイトル
1714	トゥバの人々 トゥバ共和国編
1715	トゥバの人々 中国編
1716	トゥバの人々 モンゴル編
1717	トゥバの人々 ロシア 中国 モンゴル
1718	雲南省ペー族の楽士
1719	雲南省周城村の春節
7224	雲南省大理ペー族自治州大理市周城村
1713	長浜曳山まつり
1720	漢族の祖廟：中国福建省南部
1721	福建省安溪県の烏龍茶 鉄観音
1722	客家のふるさと　福建土楼
7225	漢族の祖先祭祀：福建省南部における一事例

みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は観覧料が必要です）

第435回　8月16日（土）
世界遺産に住む――中国・客家（はっか）の伝統家屋
講師　河合洋尚（本館 助教）

福建省の円形土楼

客家の人びとは巨大な集合住宅に住んでいることで知られています。なかでもドーナツ型の円形土楼と馬蹄型の囲龍屋（いりゅうおく）は珍しいため、文化遺産保護の対象にもなっています。本ゼミナールでは、円形土楼と囲龍屋をめぐる最新の情報を紹介します。

第436回　9月20日（土）
イメージの力――みんぱくのコレクションが語るもの
講師　吉田憲司（本館 教授）

国立新美術館での「イメージの力」展の展示風景

人類はその歴史のなかできわめて多様なイメージを生み出してきました。果たしてそうしたイメージの創りあげ方や受けとり方に人類に共通の普遍性があるのでしょうか。国立新美術館での展示を経て、みんぱくで改めて開催される特別展「イメージの力」のなかに、その答えをさぐります。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

会場　本館ナビひろば
時間　14時30分～15時30分
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんどん質問をお寄せください。展示場でお待ちしております。

8月3日（日）
話者　久保正敏（本館 教授 副館長）
話題　心的イメージとは何か――イメージ・メディア論

8月10日（日）
話者　山本泰則（本館 准教授）
話題　みんぱくシンボルマークをえがく

8月31日（日）会場は日本の文化展示場です。
話者　日高真吾（本館 准教授）
話題　完成した「日本の文化」展示

刊行物紹介

■人間文化研究機構 監修
『HUMAN――知の森へのいざない』vol.06
特集「日本の鰐魅魍魎」
平凡社　1,500円（税抜）

小松和彦国際日本文化研究センター所長と作家の夢枕獏さんの対談に始まり、西欧やイスラーム世界・インド・中国との比較も含めて、妖怪についての研究成果を豊富な図とともに紹介する。

■池谷和信 著
『人間にとってスイカとは何か――カラハリ狩猟民と考える（フィールドワーク選書）』
臨川書店　2,000円（税抜）

「砂漠の水がめ」が織りなすアフリカ南部の暮らし。スイカ鍋、スイカ石鹸、スイカダンス……人類とスイカのきた道に思いをはせる。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　本館第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第435回　9月6日（土）14時～15時
【企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」関連】
極北の孤島グリーンランドにおける気候変動と文化の変遷
講師　岸上伸啓（本館 教授）
北アメリカ大陸の北東沖に世界最大の島グリーンランドはあります。現在はイヌイットが住んでいます。人類がそこに進出したのは今から四五〇〇年ほど前のことでした。同島は、一年をとおして厚い氷河が大部分を覆う氷の島です。ところが一〇世紀末に入植したバイキングは、「緑の大地」とよんでいました。氷の島がなぜ「緑の大地」なのかという疑問にもとづき、グリーンランドにおける文化の盛衰や交替を、気候変動との関係から紹介します。

第436回　10月4日（土）14時～15時
【特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連】
アート（美術）と人類学のあいだ――特別展「イメージの力」によせて
講師　吉田憲司（本館 教授）
※いずれも、講演会終了後に1時間程度の展示場見学会をおこないます。

東京講演会
会場　モンベル渋谷店5Fサロン
定員　60名（要事前申込）
※一般の方も参加可能です（参加費500円）

第110回　10月19日（日）14時～15時
多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業
講師　菅瀬晶子（本館 助教）
※講演会終了後、講師をまじえた1時間程度の懇談会をおこないます。

※国立民族学博物館ミュージアム・ショップの記事は、表紙うらに移りました。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

伝統は単数か複数か？

――モンゴル馬頭琴伝統音楽

上村明（かみむら あきら）
東京外国語大学非常勤講師

二〇〇三年、無形文化遺産保護条約がユネスコ総会で採択され、「人類の口承および無形遺産の傑作」は無形文化遺産とよばれることになった。それによって地方の芸能も脚光を浴びたが、同時に、中央と地方の関係やナショナリズムも浮き彫りになった。

ナショナルな伝統と地方の伝統

「どうして『伝統』が複数形なんだ！」。モンゴル国ユネスコ国内委員会の事務局長が、計画書を見て叫んだ。彼は元教育大臣の実力者である。

二〇〇五年、「馬頭琴（ばとうきん）伝統音楽」のユネスコによる「人類の口承及び無形遺産の傑作」宣言を受け、日本政府がユネスコ信託基金を拠出して、伝統を保存・継承するプロジェクトが実施されることになった。わたしは国際コンサルタントつまりは日本の税金の使途のお目付け役として参加していた。その最初の会議のことだ。彼は、わたしの計画書に"local traditions"と伝統が複数形で書かれていることを問題とし、馬頭琴の伝統は、単数形の"the Mongolian national tradition"（モンゴル「国民伝統」）であり、「滅びるにきまっている地方の伝統に金をつかうなど無駄だ」と断言した。

もちろん、「伝統」には、さまざまな「伝統」がある。国立馬頭琴交響楽団が代表する単数形の国民伝統は文句なく素晴らしいし、ロックとのフュージョンなど新しい馬頭琴の伝統も生まれつつあった。しかし、数年前実施されたユネスコ調査の結果、モンゴルには地域に根づきしかも高度な芸能がまだまだ存在するということがわかっていた。それに、不十分ながら政府の援助がある国民伝統に対し、地方は、一九九〇年代の市場経済化以降、経済的に疲弊し、文化活動を支えてきたインフラも崩壊にちかい。

現代の馬頭琴。
表板はｆ字孔のある木板

それでも元大臣が単数の伝統にこだわるのには理由があった。

現在でも多くの国民が、ユネスコ無形文化遺産への馬頭琴音楽の登録を、「モンゴル国が馬頭琴の『パテント』（特許）をとった」と表現する。倍音唱法ホーミーをめぐっても、ロシア連邦トゥバ共和国と中国との三つ巴（どもえ）の元祖争いがあった。「伝統」を複数形にすると、中国内モンゴルの馬頭琴がはいる含みがのこる。

さらに大きな理由も後に判明した。翌年開催予定の国民祭典「モンゴル建国八〇〇年祭」は、堺屋太一氏が総合プロデュースをてがけ、日本から観光客を動員することが計画されていた。その目玉となるのが、国立馬頭琴交響楽団を中心とする八〇〇人の馬頭琴合奏だった。日本の信託基金は、そのための動員と練習の資金とみられていたのだ。

「伝統芸能」と「本物の芸能」

民衆の識字率のひくかったモンゴルでは、芸能は、革命と社会主義国民国家建設のため重要な役割を担わされてきた。文化の発展は伝統と革新の二語で語られてきた。伝統は革新を内部に含む動的な概念なのである。馬頭琴には六〇年代にバイオリンを参考に楽器の改良が加えられ、ソ連ロシア式のプロ奏者養成制度ができた。こうして新社会主義国民文化の創造が目指されたのだ。その延長線上に、一九九二年創設のモンゴル国立馬頭琴交響楽団はある。

一方で、八〇年代には古くから土地に「根ざす」芸能が注目されるようになり、西洋化した伝統芸能と区別して、「ヤズゴール（根元）・オルラグ（芸能）」と名づけられた。この語を造語した民俗音楽学者J・バドラーは、英語に訳すと"authentic folkart"にあたるという。つまり古いものが「本物」なのである。現在、モンゴル国がユネスコに登録した一一の無形文化遺産のうち五つがモンゴル西部の芸能である。西部は文化的に遅れた地方として長年差別されてきた。その後進性によって、逆に「本物」のモンゴル基層文化として評価されたのだ。

フェスティバル・コンサートは「伝統」の縮図となる

その後、プロジェクトは、さまざまな思惑を含みながらも、地方を切り捨てることなく進行した。が、中央のプロと地方のアマとに位置づけられたふたつの勢力はとかく対立した。中央のプロ演奏家たちは、上から目線で地方での伝承に西洋式の楽譜を押しつけようとし、地方の伝承者たちは彼らを自分たちの文化の簒奪者（さんだつしゃ）と非難した。

そして、プロジェクトの集大成となるフェスティバル・コンサートを迎えた。会場のスフバートル広場では、国立馬頭琴交響楽団が上段、アマの奏者が下段に並び、同楽団長が指揮をとって、「国民伝統」の馬頭琴スタンダード曲が合奏されて大団円となった。

ひな段の下に地方の演奏者が並んだ。指揮はバトチョローン氏

この光景は、ふしぎと両者の関係を象徴していると、わたしは思う。両者は、対立しながらも、じつは補完しあっている。商品として世界に流通する前者の高い芸術性は、後者が「本物」であることによって、モンゴルの伝統として裏書きされているのだ。

多文化をあきなう

小さな町の大きな挑戦――〝穏豊社会〟への一里塚

神田浩史　特定非営利活動法人泉京・垂井副代表理事

地域の活性化や、循環型社会の実現に向けて、フェアトレードが活用されている。岐阜県の垂井町では、フェアトレードに地産地消を組み合わせ、地域の人びとが穏やかに豊かに暮らせる〝穏豊社会〟を目指す。

「今日から垂井町もフェアトレードタウンを目指します！」。今年三月に熊本市で開かれた第八回フェアトレードタウン国際会議のなかの分科会「日本におけるフェアトレードタウン運動」のなかで、わたしはキッパリと宣言した。四年前から始めた〝フェアトレードデイ垂井〟の関係者のあいだでは議論の端にのぼっていたフェアトレードタウン構想。垂井町内での調整を始める前に、対外的に宣言することで、小さな町の大きな挑戦は始まった。

揖斐川中流域の交通の要衝・垂井町

岐阜県不破郡垂井町は濃尾平野の北西端に位置し、町のまんなかを揖斐川支流・相川が貫く扇状地にある。古に美濃の国府や一宮が置かれ、江戸時代には中山道と美濃路の分岐点の追分宿として多くの人馬が往来した。今日も東海道本線・新幹線、名神高速道路などが通る交通の利便性の高さから、多くの工場が立地している人口約二万八〇〇〇人の小さな町である。

垂井町は、工場立地や交通の利便性の高さゆえに急激な人口減は免れているものの、一見豊かな緑に見える町内の山林には荒廃林が目立ち、田畑の維持も困難で、農林業を巡る状況は全国各地の農山村と変わりない。おまけに近隣山村からの薬草や薪炭を商うことで賑わっていた中山道垂井宿は、今や往時の面影はなく、商店街として活況を呈したという半世紀前の姿も消え失せて久しい。

このような町で四年前に〝フェアトレードデイ垂井〟を始めた。垂井町内でフェアトレード商品を扱うカフェと、わたしも所属しているまちづくりNPO法人泉京・垂井が、おもに岐阜県内でフェアトレード商品を扱っているお店に声掛けして、フェアトレードや世界の南北格差についての理解を少しずつでも高めていこうと考えた。一年目は町内の地区集会所を借りて一〇店舗ほどの出店から始まった。フェアトレード月間の五月とは思えない土砂降りの天候にもかかわらず、予想外の大勢の来場者があり、建物に入れない人も出るほどの盛況ぶりだった。

二年目は町内で最大のお寺・平尾御坊願證寺の境内で。かつては一二月の報恩講で見世物や露店が立って賑わったというお寺に、約二五店の出店と天候にも恵まれ、三〇〇〇人もの人出でごった返した。三年目からはさらに大きな会場である垂井町立朝倉運動公園で開催するようになり、約六〇店の出店に来場者は四〇〇〇人にまで膨らんできた。一方で、やみくもに規模拡大することへの疑問の声も出始めたので、フェアトレードや地産地消を扱う基準を厳しくして、四年目となる今年は出店者こそ約五〇店と絞り込んだが、来場者は五〇〇〇人ほどまでになった。

循環型社会を目指して

フェアトレードはおもに途上国の収奪的な生産構造を改めることを目標にしているが、このような問題意識はわたしたちの身近でも大切である。古来、揖斐川流域では、流域内の物資循環、人の往来、それらに伴う資金循環を基本に地域社会が成り立っていた。上流域の木々は薪炭や用材として中下流で活用され、中流域から下流域にかけては肥沃で水利に優れた田畑に恵まれ、河口部の伊勢湾の漁業は流域の恵みを活かして盛んであった。こういった流域単位の循環型社会は、一〇〇年ほど前に舟運から陸運へと輸送手段が切り替わり始めたころから変容し、上流域のダム建設、エネルギー革命などさまざまな要因が加わり、衰退の一途をたどってきた。

経済のグローバル化の進展により、収奪的な構造のもとで生産された低価格の農林水産品が大量に輸入されてきた。そのため、日本各地で農林漁業は衰亡の途をたどっており、それは揖斐川流域においても例外ではない。しかしながら、近年、そういった流れに抗うような試みが流域各所に見受けられるようにもなってきた。上流域では、豊かな水資源や林産物を再生可能エネルギーとして活用する試みが。中流域では、多くの直売所の現出による農産物の地産地消の促進が。そして下流域では、元々盛んだった蛤や蜆の復興による漁業再生が。

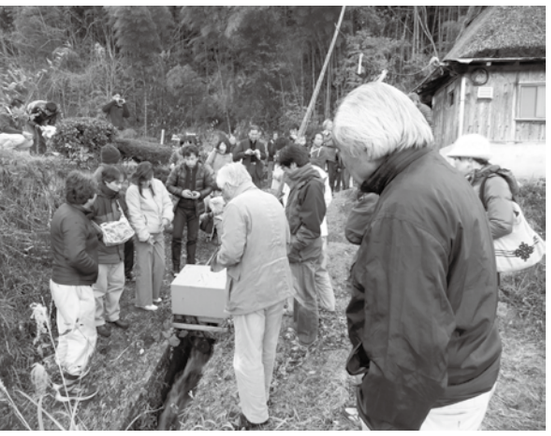
現在は点在しているこういった試みが、もう一歩も二歩も流域住民に知られるようになり、自覚的に流域住民に活用されるようになれば、揖斐川流域の循環型社会の再興の可能性も絵空事ではなくなる。わたし自身、不公正ともいえる収奪構造に依拠した生産・消費構造から脱却し、環境適合型の生産・消費活動を支える社会のことを〝穏豊社会〟と名付けている。穏豊とは、内面的にも対外的にも穏やかであることが豊かであるという意味である。揖斐川流域での循環型社会の再興は、まさにこの〝穏豊社会〟の実現に向けての歩みであると位置づけている。

一里塚としてのフェアトレードタウン

垂井町には、国の史跡に指定された中山道のふたつの一里塚のうちのひとつが存在する。小さな町がフェアトレードタウンを目指すことは、それ自体、非常に大きな挑戦である。しかしながら、フェアトレードや地産地消をまちづくりの根幹に置くことを宣言するフェアトレードタウン宣言は、〝穏豊社会〟の実現に向けては一里塚に過ぎない。この宣言が、垂井町の一里塚のように地域の人たちに愛され、後世まで語り継がれるよう、フェアトレードタウンを目指す小さな町の大きな挑戦を見守って欲しい。

第8回フェアトレードタウン国際会議で発言する筆者

第4回フェアトレードデイ垂井会場のようす



揖斐川源流域坂内の小水力発電

揖斐川河口付近・正面は長良川河口堰

味の根っこ

韓国の女の子が大好きなおやつ

ホットク

高 正子（コオ デョンジャ）　神戸大学非常勤講師

焼きあがったホットク

韓国の屋台のおやつ

韓国に行くと駅の周辺や繁華街でよく屋台を見かける。野菜や餅を甘辛く炒めたトッポッキや魚肉のオデン、キムパプ（海苔巻き）、天ぷら、そしてホットクなどなど。そのなかでも女の子が特に好きなのがホットクだ。小麦粉と餅粉で作られ、パンでも餅でもなく、なかに黒砂糖とシナモンが入っている。焦げ目がつくまで焼くと、中身が溶けてまるで蜂蜜のように甘くておいしい。寒い冬、女子学生たちは、屋台で売られるホットクを買って食べるのが学校帰りの楽しみなのだ。ホットクは漢字では胡餅と書く。インターネットで検索すると、一九二七年仁川に上陸した中国労働者たちに、安くて食べやすい餅を当時の華僑たちが開発したとあるが、実際はホットクがいつ韓国に伝わったのか定かではない。ただ確実なのは、一九六〇年代にはすでにホットクが屋台のおやつとして売られていたことだ。いまは昔ながらの黒砂糖にシナモン入りのホットクよりは、あんこやピーナッツなどが入っているのが主流となっている。

じつはこの「黒砂糖にシナモン入り」の元祖ホットク、わざわざ韓国に行かなくても、大阪生野区のコリアタウンで味わうことができる。

コリアタウンで初めてホットクを売り出した李春成（イチュンソン）さんのお店〝のりちゃん〟だ。四〇年前（一九七〇年代）済州島から日本に渡ってきた李さんは、韓流がブームになる少し前に焼肉屋さんの軒先を借りて商売を始めた。わたしが初めてこの店を知ったのは、コリアンフードが大好きで週に一度は必ず家族でここに食材を買いに来るという学生が、「コリアタウンで一番ホットクがおいしい店」と教えてくれたからだ。以後、ホットクはこの店で買うことにしている。李さんのホットクは故郷・済州島の味であり、父親（アボジ）との思い出の味だ。幼いころ、父親が連れて行ってくれた東門市場で食べたホットク……。後に、学校に通うため移り住んだソウルでも済州島で食べたホットクに勝るものはなかった。李さんは自分が一番おいしいと思った、思い出のホットクを再現して売り始めた。結果は予想通りの「テバク（大当たり）！」。現在もコリアタウンのなかほどに店を構えている。

ホットクの店“のりちゃん”の李春成さん

在日コリアンの味

大阪のコリアタウンはJR環状線鶴橋駅と桃谷駅のあいだ、かつて〝猪飼野（いかいの）〟とよばれた地域に位置している。この地域には済州島から渡って来た在日コリアンたちが多い。一九二三年に済州島と大阪を結ぶ定期航路が運行されるようになったためだ。日本の植民地支配によって生活に困窮した人たちが、当時〝東洋のマンチェスター〟とよばれた大阪にやってきた。ところが、外国人が住居を探すのは難しく、下町であったこの地域にようやく借家を得て暮らすようになったのだ。

一九三〇年代になると、済州島から家族を呼び寄せる人びとが増え、密集居住地・猪飼野に朝鮮市場が生まれた。どこにいても祖先を祭る儀礼を忘れることのないコリアンたちが祭祀に必要な食材などを売り買いする市場を必要としたからだ。このころの賑（にぎ）わいは『アサヒグラフ』（一九三三年一一月八日号）にも掲載されている。当初は、表通りには店を開けず、狭い路地裏に細々と店が構えられた。多いときには屋台も合わせて八〇店舗ほどがひしめき、近畿一円のコリアンが集まってきた。表通りの日本人店主の店でも、集まってくるコリアンをめあてに朝鮮靴（コムシン）を並べる店があった。

やがて戦争が始まり空襲が激しくなると、商店街の人たちも地方へ疎開し、戦後もなかなか戻ってこなかった。そこで、路地裏で商売をしていたコリアンたちが、閉められていた商店の軒先を借りて、キムチや大豆もやし、朝鮮餅などを売り始めた。これが今のコリアタウンの基となった。戦後、日本に残ったコリアンたちは日本国籍をはく奪され、外国人だという理由ですべての福祉政策から排除された。厳しい生活のなかで家族が団結し助け合う、精神的な拠（よ）りどころとなったものが祖先祭祀であり、それを支えたのがコリアタウンに集まる食材であり、人の情であった。

今もコリアタウンには人びとが集まる。女の子たちが歩きながら頬張るホットクにも、この地に生きてきた人びとのさまざまな味が染み込んでいるのではないか、とわたしは思う。

生野区のコリアタウン。東側からの風景

在日コリアンの食品メーカー徳山物産のホットク

「ホットクセット」を使ったレシピ（約6枚）

ホットクミックス　200 g	① ボールにホットクミックスと水 130 mlを入れる。
シナモンシュガーミックス　50 g	② 木ベラなどで粉っぽさが無くなるまでよくこねる。（手でこねてもよい）
	③ ボールにラップをかけ、常温で 10 分ねかせる。
	④ 生地を 6 等分し、手に食用油を塗り、丸める。真んなかにシナモンと黒砂糖を入れ、かぶせる。
	⑤ フライパンにバターをいれ、そこに④を入れて 1、2 分焼く。片面が焼けるとテコなどの平たいもので抑え、ひっくり返す。

じつに深遠な

人間学のキーワード

ガバナンス

Governance

出口 正之（でぐち まさゆき） 民博 民族文化研究部

ガバナンスは、新聞でもすでに解説抜きにカタカナだけでも使用されるようになった。あえて訳語を挿入する場合には「統治」とされることが多いが、緒方貞子（おがたさだこ）は『統治』と『自治』の統合の上に成り立つ概念」と表現した。じつに深遠な見事な表現力だ。小渕内閣時代、河合隼雄（かわいはやお）が座長を務めた「21世紀日本の構想」懇談会では、「協治」の訳語が使われた。未だに納得できる定訳・定義はなされていなく「ガバナンス」とカタカナ表示されることが多い。

人間社会は「統治」のシステムとして、「政府」（ガバメント）を作り上げてきた。「政府」も「ガバナンス」も「舵（かじ）を取る」という意味をもつギリシア語を語源として、どちらも「統治」であることは変わらない。ところが、経済がグローバル化し、多国籍企業が跋扈（ばっこ）するともはや国家の役割が相対的に小さくなってきた。お金はグローバルに動き、舵を取る人をめぐって、会社とは一体誰のものかが問われ始めた。株主や利害関係者に対する説明責任と責任や権限の在り方を核に、アングロサクソン的な「プリンシパル（主役＝株主）―エージェント（代理人＝経営者）理論」に基づいた「コーポレート・ガバナンス」（企業統治）が重要視されるようになった。日本においても、とりわけ金融機関の不祥事から、金融システムの大改革を意味する「金融ビッグバン」の影響、さらには商法などいくつかの法律を再編成した二〇〇六年の会社法の施行などを受けて、ガバナンスという文字を目にしない日はないほどまでになった。

他方で、国際社会では地球的規模での解決が必要な問題、いわゆる「グローバル・イシュー」の問題解決のために、国家以外の主体の重要性が増してきた。とりわけ国連ではグローバル・コンパクトやＵＮＤＰ（国連開発計画）の人間開発報告書のなかで積極的に「ガバナンス」の用語を使用した。開発の議論のなかでも制度だけではなく、ガバナンスに重点を置き、「グッドガバナンス」というあたかも制度に息吹を与えるかのような標語も誕生した。

学術面では「政府なきガバナンス」（ローズノー他）、「政府からガバナンスへ」（ローズ他）などというキャッチフレーズが強調されてきた。そこでの含意は、同語源を有する「政府」（ガバメント）を意識しつつ、企業やＮＧＯの主体の役割の増大とその組織の「統治」を政府との違いのなかで議論している。

ＮＧＯといえば、日本においても一一〇年ぶりに、市民社会組織の中核である公益法人制度改革がなされ、「行政の関与を最小化し法人のガバナンスを強化する」と謳（うたわ）れた。その結果、残念ながら、政府が法人の「ガバナンスの程度」を評価し始め、人事にも介入し、結局は法人の自治が進んだのではなく、政府によるガバナンス・コントロールの強化が進んだという皮肉な指摘もある。「政府なきガバナンス」は、日本においては、政府主導のガバナンスになってしまうのだろうか？

異聞逸聞

変容するボリビアの日本人学校

吉富 志津代（よしとみ しづよ）　大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

ボリビアへの移民

一〇〇年以上前、日本が貧困から抜け出すために打ち出した移民政策は、南米諸国の労働力不足状況との双方のニーズが合致した結果であった。その後、第二次世界大戦中に途切れていた移民船は再開され、ボリビアのサンタクルスが移住者を受け入れたのは一九五五年ごろだった。それは、高度成長期に入ってライフスタイルが多様化していく日本より、素朴なボリビアの生活を選ぶ人びとであった。二〇一四年三月に筆者が訪れたときには、オキナワ移住地、サンファン移住地、サンタクルス市周辺にそれぞれ七〇〇～八〇〇名の日系人が暮らしており、まだ一世たちがコミュニティ活動の主体となっているものの、高齢化に伴う世代交代のなかで日本人学校の役割にも変容がみられた。

自尊感情を取り戻すために

ブラジル同様ボリビアからも九〇年代以降、多くの日系ボリビア人が日本に渡ったが、また戻って来た人も少なくない。戻ってきた子どもたちが学ぶ小学校一年生のクラスで授業をしていた日系四世の三〇代女性もまた同様だった。スペイン語を母語とする彼女は、相当な努力をして日本で小・中・高の教育を受け、専門学校に進んだあとは貿易関係の会社に就職したものの仕事に納得できずにいた。考えた末、家庭で使う簡単な日常会話レベルのスペイン語を改めて学び直すためにボリビアに戻り、そこで自分の進みたい道を見つけることになる。授業は場合によってはスペイン語での説明を補填しながら日本語で進めていた。ふたつの言語と文化の狭間（はざま）で悩んだ末に自尊感情を取り戻した経験から、同じ悩みをもつ子どもたちへの教育に携わることが自分の使命だと感じ、今ではいきいきと毎日を送っている。

サンタクルス日本語普及学校の１年生のクラス

状況をプラスに活かす

移住した日系人たちがデカセギとして日本に戻るという状況に流されていく子どもたちが、その環境をプラスに活かす可能性をようやく見いだし、同時に南米の日本人学校は、姿を変えて役割を復活させつつある。ボリビア日本人会の役員のひとりは、「日本語という言語を学ぶだけではなく、日本人の勤勉で正直な文化も含めて学ぶことが、ボリビアと日本のふたつの国にかかわって活躍できる人材育成という戦略にもなる」と語る。

今後のグローバル化が進む世界で、日本が取り残されないための知恵につながる視点ではないだろうか。

制服の世界 THE UNIVERSE OF UNIFORMS 世界の制服

空の企業文化

八巻（やまき）恵子（けいこ）　就実大学准教授

海外旅行を想像してみよう。出国審査を終え、搭乗口に向かう。機内はまだいずれの国にも属さない、あいまいな空間のはずだ。しかし不思議なことに、笑顔で迎えてくれる客室乗務員は、その航空会社の本社がある国の民族性を強調する装いをしている。

マオリのコルをモチーフとしたワンピース
（提供・ニュージーランド航空）

スイッチ・オン！

制服を着るとスイッチが入る。オフからオンに気持ちが切り替わる。エネルギーがチャージされてくるようで背筋がぴんとする。制服は舞台衣装のようなものだ。ここから「素」のわたしではない時間が始まる。客室乗務員の制服を着て空港ロビーに出ると、わたしに対する人びとの態度も言葉遣いも変わる。これが制服のマジック。同じ制服の仲間とともに今日も明るく空の旅のアシスタントをつとめる。

キャビン・アテンダントは和製英語

キャビン・アテンダント（CA）という呼称は和製英語で、世界多くの国ではフライト・アテンダント、キャビン・クルー、スチュワーデスまたはスチュワードなどの英語が一般的である。運航乗務員であるパイロットとともにクルーとよばれる。

旅客を運ぶ世界初の商業航空会社は、ドイツのツェッペリン伯爵によって一九〇九年に創設されたDELAG社（Deutsche Luftschiffahrts-Aktiengesellschaft）で、飛行船（airship）が使用された。ship（船）とよぶように、航空機には船舶との共通用語がたくさんある。クルーの制服も起源は海軍の軍服にさかのぼり、紺、茶、黒、緑、白など、保守的なデザイン、帽子の着用といった伝統が今も伝わっている。

伝統的でありつつ企業広告

国際航空運送協会（IATA）に加入している国際線航空会社は世界中に二三〇社以上あり、それぞれの制服を採用している。伝統的な色やデザインの流れをくみつつも、企業イメージを担うアイコンとしてファッション性や流行も重視している。制服の着方には詳細な社内規定があり、着崩してはならない。一方、一九七〇年以降に航空会社の民営化が進んだ時代には、有名ファッションデザイナーたちによる華やかな制服が流行し、奇抜な色彩や目立つデザイン、超ミニスカートの採用など、個性的で主張の強い制服が多くあらわれた。一九九〇年以降は、航空機移動の大衆化に伴い制服もカジュアルになり、デザインを一般公募する航空会社もあらわれた。いずれも企業文化や経営理念、サービスに対する考え方を反映したものである。

サービス経済化とグローバル化を迎えたこんにち、航空会社は、その背景となる民族文化も企業の個性であり経営資源とみなすようになってきた。民族衣装のデザインやモチーフを取り入れた制服は乗客の受けもいい。サロンケバヤの制服で有名なシンガポール航空は、一貫してシンガポールのホスピタリティを強調している。ドバイのエミレーツ航空の客室乗務員の国籍はさまざまだが、制服のスカーフをイスラム圏の女性をイメージするように頭から顔、首に巻くスタイルで人気がある。香港のキャセイパシフィック航空は、襟の形や色彩にチャイナ服の要素が取り入れられている。ニュージーランド航空は、マオリのコル（マオリ語でシダの新芽を意味し、成長や力のシンボル）をモチーフとした渦巻きのデザインが有名だ。社員にマオリもいるために、タトゥーは身だしなみの会社規定に反するものではなく、利用者に対しても少数民族文化の理解を求める旨の文章を世界に向けて公表している。

制服は企業のシンボルであり企業文化を表象する装置でもある。客室乗務員という職種への志望動機として、制服へのあこがれをあげる若者たちは多い。その制服の魅力は、空の文化が作り出したイメージの魅力にほかならないのである。

シルエットもチャイナ服の要素
（提供・キャセイパシフィック航空）

スカーフの巻き方がイスラム圏のイメージ
（提供・エミレーツ航空）

自然のなかに意味をもたせたマオリのデザイン
（提供・ニュージーランド航空）

サロンケバヤのユニフォーム
（提供・シンガポール航空）

月刊みんぱく 2014 8月号

編集後記

日本で学び、働く異邦人は確かに増え、駅などの表示も日英だけでなく、中国語、ハングルが併記されることが珍しくなくなった。みんぱくの本館展示の解説やキャプションも、2008年度に始まった展示リニューアルを機に、和文と英文の両方で書かれるようになった。完全にバイリンガルで情報提供がされているわけではないが、以前に比べて、日本語話者でない来館者にも展示の意図がわかりやすくなっているかと思う。ピクトグラムや写真といった文字以外の視覚情報による案内の検証も進められている。

外国人を迎えるためのこうした環境改善は国内のあちこちでおこなわれているが、入国審査に関しては相当感じが悪い印象を残す国のひとつだろうと、空港を通るたびに思う。16歳以上の外国籍の人は、指紋と顔写真を取られ、歓迎されざる人物でないかどうかデータベースと照合されるのである。「おもてなし」しますと言って呼び寄せておきながら、門前でいきなり犯罪者扱いしているようなものである。「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」の一環として、入管での生体認証はそろそろ廃止してもらえないものだろうか。

（山中由里子）

●表紙：日本に暮らす多みんぞくな人びと。
「多みんぞくニホン」セクション導入部のバナーより
（撮影・庄司博史、菅瀬晶子、陳 天璽、南 真木人ほか）

次号の予告

特集

コラボの力

※みんぱくウィークエンド・サロンの情報は、13ページに移りました。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00～17：00）

月刊みんぱく 2014年8月号
第38巻第8号通巻第443号　2014年8月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　河合洋尚　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　丸川雄三
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology